



女性兵士をめぐるイメージと実態：
ソ連、ロシア、ウクライナを事例に

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学女性学研究センター 公開日: 2024-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 信子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000264

第3講演

女性兵士をめぐるイメージと実態 ——ソ連、ロシア、ウクライナを事例に——

橋本 信子

こんにちは、東欧の地域研究をしております橋本と申します。よろしく
お願いいたします。私からは、ソ連とその構成国であったロシア、ウクラ
イナにおける「女性兵士をめぐるイメージと実態」というテーマでお話し
します。

はじめに 東欧・ロシアにおける戦争と〈日常〉との近さ

今回「戦争とジェンダー」というテーマをいただきまして、一番に私の
頭に浮かんだのが、東欧やロシアの女性たちと戦争との近さ、あるいは「戦
う女性たち」というイメージでした。日本に暮らす私たちの日常感覚から
しますと、前線で武器を手に戦闘する女性兵士という姿は、もっとも遠い
ものを感じるかと思います。しかし、東ヨーロッパの国々においては、戦
う女性のイメージというのはそれほど日常からかけ離れたものではありません。
数年前から、日本のメディアでも、バルト諸国やポーランドにおいてロシアを
仮想敵とした軍事訓練に参加する女性たちを取り上げたニュースなどが報じら
れていました¹。

¹ 例えば、ハフポストNEWS「エストニアの住民は、ロシアの侵攻に備えて軍事訓練
を繰り返す」（2017年5月8日）https://www.huffingtonpost.jp/2017/05/08/estonia_n_16481280.html（2023年2月28日最終確認）、日本経済新聞「バルト3国 母も脅威
に備え」（2017年8月15日夕刊）、朝日新聞「[「国を守るため命捧げる」会社員も医師
も 東欧の市民軍]」（2019年12月1日）など。

今年（2022年）2月24日に、ロシアによるウクライナ侵攻が始まってからは、ウクライナの女性戦闘員の姿が頻繁に報道されているのをご覧になっているかと思います。特に侵攻の初期には、インターネット上に戦闘服姿のモデルと見まがう女性の画像が拡散したことを覚えていらっしゃる方も多いかと思います。実は、こうした現象は初めてというわけではありません。過去にも女性兵士が注目され、称賛されるような現象がありました。バルト諸国やウクライナも構成国であったソ連を例に見ていきたいと思えます。

ソ連の女性兵士のイメージと実態

女性の戦争への参加（兵士としての参加）

ところで、戦地に赴く女性や戦う女性は古くから存在しました。フランス革命においては男装の女性革命家も現れましたし、従軍看護婦や酒保（兵営などで日用品や飲食物を売った店）の店員といった形で戦地に赴く女性もたくさんいました。第一次大戦の頃は、小規模ですが女性だけの部隊も結成されています。けれども、公式に、それも大規模に女性が軍隊に参入していったのは、第二次世界大戦時のソ連でしょう。諸説ありますが、およそ80万から100万人の女性たちが戦場に行ったといわれています。それも、医療や看護、調理や洗濯といった領域だけではなく、戦闘員としても参加しています。後述のように破壊工作などにも従事しました。この時代、女性は徴兵の対象ではありませんでしたので、彼女たちは自ら志願してこれらの任務にあたったわけです。

英雄、アイコン、アイドル的存在としての女性兵士

ソ連の戦う女性たちは、国民の範、模範としてたたえられるようになっていきます。女性たちのなかからは、際立った戦果を上げる兵士も現れます。とりわけ、リュドミラ・パヴリチェンコ（Людмила Михайлівна Павличенко, 1916-1974）という狙撃手は、アイコン、あるいはアイドル的な存在になっていきます。彼女は戦闘中に負傷して戦線を離れるのです

が、その実績と知名度を買われて、アメリカに派遣され、戦争協力を取り付けるための宣伝塔にもなりました²。

日常に浸透する闘う女性の像～モスクワ地下鉄の女性兵士たち

パヴリチェンコのような突出した英雄だけではなく、集合体としての名もなき女性兵士たちも称賛されています。例として、首都モスクワの地下鉄に設置されている女性兵士の像をいくつか見ていただきましょう³。

ソ連にとって地下鉄というのは大変重要な意味を持つものです。国民の誇りといってよいでしょう。1931年に計画が承認され、1935年に開通しました。その後も戦争と並行して拡張が進められました。その時期に造られた、あるいは戦後すぐに造られた駅は、ロシア革命や国家建設、祖国防衛をテーマにした豪華な装飾が施されました。そうした駅の構内にある女性兵士の像をいくつか紹介しましょう。

革命広場（Площадь Революции）駅の射撃手の少女は、銃を持っています（写真1）。わかりづらいですが、落下傘の降下兵の像も女性です（写真2）。バウマンスカヤ（Бауманская）駅のエントランスの上には、スカートをはいた女性兵士のレリーフがあります。右手に手榴弾、左手に銃を持っている女性兵士の像もあります（写真3）。また、カホーフスカヤ（Каховская）駅のレリーフにも女性兵士が描かれています。オクチャーブリスカヤ（Октябрьская）駅にもレリーフがあります（写真4）。ベラルूसカヤ（Белорусская）駅の巨大な彫刻「ベラルーシのパルチザン」（※パルチザン＝非正規軍）は、真ん中に中年か老年の男性がいて、半歩後ろに男女がいます（写真5）。この構図はよく見られるものです。先ほどとよく似ていますが、こちらはパルチザンスカヤ（Партизанская）駅のパルチザン像です（写真6）。そばに立っている人と比べると、大変大きい像だということがわかっていただけるかと思います。これもやはり男性が、後

² パヴリチェンコを取り上げた映画に、Битва за Севастополь（2015年）がある。なお、邦題は「ロシアン・スナイパー」とされているが、パヴリチェンコはキーウ近郊出身である。

³ モスクワの地下鉄の装飾に関しては、岡田（2009）を参考にした。

ろの女性と青年を率いている構図ですね。この女性も戦闘員です。武器を持っていますね（写真7）。



写真1 モスクワ地下鉄
革命広場駅
(2021年5月 Martin
MacDonald氏撮影)



写真2 モスクワ地下鉄
革命広場駅
(2021年5月 Martin
MacDonald氏撮影)



写真3 モスクワ地下鉄
パウマンスカヤ駅
(2021年2月 Martin
MacDonald氏撮影)



写真4 モスクワ地下鉄 オクチャープリスカヤ駅
(2022年2月 Martin
MacDonald氏撮影)



写真5 モスクワ地下鉄 ベラルースカヤ駅
(2021年10月 Martin
MacDonald氏撮影)



写真6 モスクワ地下鉄
パルチザンスカヤ駅

(2021年4月 Martin MacDonald氏撮影)



写真7 モスクワ地下鉄
パルチザンスカヤ駅の巨大彫刻

(2021年4月 Martin MacDonald氏撮影)



写真8 モスクワ地下鉄 パルチザンスカヤ駅のゾーヤ・コスモデミヤンスカヤ像
(2021年4月 Martin MacDonald氏撮影)

パルチザンスカヤ駅には、実在の人物の像もあります(写真8)。女性兵士の象徴的な存在となったゾーヤ・コスモデミヤンスカヤ(Зоя Анатольевна Космодемьянская, 1923-1941)という人物です。彼女は18歳

で志願してパルチザンの破壊工作員となります。ところが、作戦中にドイツ軍に捕らえられて処刑されてしまいます。死後、ソ連で初めての女性英雄という称号を得ると、ソ連各地に彼女の像が建立されていきます。このパルチザンスカヤ駅の像などは、処刑の翌年に早くも建てられています。

ゾーヤの像は、その時々、政治的なニーズに合わせて、その時代時代に求められる女性像として各地に建てられて表象されていきます。たとえば、戦後すぐの1950年頃の像に比べると、1957年の像は少々年齢が上がっているかのように見える気がします。さらに、1986年（写真9）、2008年の像を見ていくと、時代によってかなりイメージが変わっているように見えます⁴。

ゾーヤは若くして非業の死を遂げたため、永遠性の象徴、あるいは神聖な存在になっていきました。1986年の像などは、まるでキリストの受難の

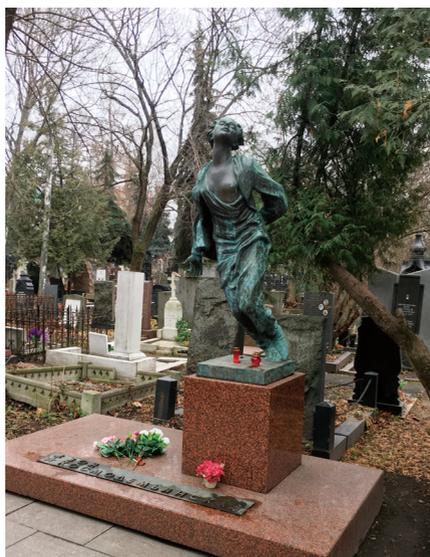


写真9 モスクワ・ノヴォデヴィチ墓地のゾーヤ・コスモデミヤンスカヤ像（1986年造）
（2021年11月 Martin MacDonald氏撮影）

⁴ ゾーヤ像の変遷については、Harris（2012）を参考にしたが、各像の印象は筆者個人によるものである。

様子を重ねて見てしまうのですが、いかがでしょうか。2008年の像になりますと、もはや誰の像なのかわからなくなっています。神話の登場人物のような印象を受けます。ここにはもともとゾーヤの胸像があったのですが、2006年に何者かによって壊されてしまいました。そのため作り直したものがこういう形になっています。

ここまでロシアのものを見てきましたが、女性兵士像があるのはロシアだけではありません。たとえば、こちらはキルギスタンの戦争記念のモニュメントです。やはり戦う女性、女神のような像です（写真10）。こちらはベラルーシの集合住宅の壁面につくられたモザイクの壁画です⁵。例の構図、男性のリーダーの後ろに青年男女の構図になっています。女性は銃を持っていますね。

ウクライナにもあります。首都キーウを見下ろす丘に剣を持つたいへん



写真10 キルギス共和国Ottukの大祖国戦争記念モニュメント
(2017年8月 Martin MacDonald氏撮影)

⁵ <https://imgur.com/RMhD9FU> (2023年2月25日最終確認)

大きな女性の像があります。こちらは「ウクライナ国立第二次大戦歴史博物館」⁶というメモリアルコンプレックスのなかに建っています。今、この博物館のホームページにアクセスしますと、EU旗とともに（ウクライナはEUに入っていませんが）、合成でしょうか、ウクライナの伝統的な花冠をかぶせられたような写真が掲げられています⁷。

というように、英雄となった人物ですとか、特定の人物ではないけれどもイメージとしての女性兵士の表象というものをご覧にかけました。

ソ連の女性兵士が直面した現実

では、実際に戦場を経験して帰還してきた女性兵士たちの扱いはどうだったのでしょうか⁸。ソ連では戦争中（1940年代）から兵士らの証言を採取して残しています。それによると、立派な兵士であろうとか、国の模範となろうというような意識が非常に濃厚に記されています。でも、現実には厳しいものだったようです。男性兵士と同様に戦闘による負傷を負ったり、PTSDに苦しんだりします。さらに女性兵士の場合は、「戦地妻だったのだらう」とか、「夫や恋人を探しに行ったのだらう」とか、あるいは「性的に乱れた女性に違いない」というような偏見をしばしばもたれることがあったようです。

実際、セクシャルハラスメントを回避するために上官と関係をもたざるを得なかった人もいたり、あるいはストーカー行為を受けたり、逆恨みによってパワーハラスメントを受けたりといったことも多々あったといわれています。しかし、個人に対する扱いというのは、それがたとえ暴力的であったり尊厳を損なったりするようなことであっても、取るに足りないこととして扱われがちだったといわれています。そして、戦場から帰還した後も、男性のみが英雄扱いを受ける傾向があったといえます。元女性兵士

⁶ Національний музей історії України у Другій світовій війні かつては「大祖国戦争博物館」と呼ばれていたが、2016年に改称。なお、大祖国戦争とは、ソ連における第二次世界大戦の呼称である。

⁷ <https://warmuseum.kyiv.ua/> 2022年11月10日アクセス時のトップページ。

⁸ 第二次世界大戦で従軍した女性兵士については、Bischl（2004）を参照。

らは「性的なこと勝ち取った」というふうに言われたくないがために勲章を身につけたがらないということもあったそうです。先ほどのパヴリチェンコのように、国家の広告塔のような特別な扱いを受けた兵士もいたにはいたのですけれども、そのことが大半の女性兵士への風当たりの改善には結びつかなかったといってよいでしょう。

ところが1980年代になりますと、そういう多くの無名の女性兵士たちの声があらためて拾い上げられます。2015年にノーベル文学賞に選ばれたスヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（Светлана Александровна Алексиевич, 1948-）という作家がいます。彼女はベラルーシ出身で、ロシア語で書く作家ですが、1985年に『戦争は女の顔をしていない』という著作を著しています。これは、500人以上の元女性兵士たちから、アレクシエーヴィチが直接、個別に体験を聞き取って編んだ証言集です。戦場でも装いにこだわったり、なけなしの物でおしゃれをしたりと日常を忘れていない女性兵士たちの様子が生き生きと語られる一方で、戦場で受けたセクハラや、戦後の差別などについても語られています。

この著作はたいへん反響を呼びまして、共感とともに反発も沸きおこしたといわれています。興味深いことに、若い世代に衝撃をもって迎え入れられているという現象があります。2019年にはこの著作を翻案とする映画「戦争と女の顔」（原題 Дылда）がロシアで製作されています。同作の監督カンテミール・バラコフ（Кантемир Артурович Балагов）氏は1991年生まれです。日本でも小梅けいと氏の作画で漫画化されていますし⁹、2022年に本屋大賞を受賞した『同志少女よ、敵を撃て』（早川書房 2021年刊）も同書にインスパイアされた作品です。著者の逢坂冬馬氏は『戦争は女の顔をしていない』が発表された1985年生まれです。

ロシアの女性兵士のイメージと実態

さて、1992年にソ連は解体し、15の共和国がそれぞれ独立国家となりま

⁹ KADOKAWAより2020年から2022年にかけて3巻まで刊行。

す。その中でも際立って大きな国土と人口をもつのが、ロシア連邦とウクライナです。両国は国境を接するお隣同士で、同じ東スラブ系の民族が多くを占めています。移住や婚姻などによる人的なつながりが深く、言語も近くて意思疎通が可能です。それゆえ「兄弟国」と称されることも多く、一体のように見なされがちでした。しかし、ソ連崩壊の前後から両国の対立が顕在化していきます。2014年に、ウクライナでマイダン革命あるいはユーロマイダンと呼ばれる運動が起こり、親露派の大統領が逃亡します。ロシアはこれに危機感を抱き、ウクライナ南部のクリミアを併合します。さらに、ロシアが支援する親露派分離主義者がウクライナ東部で蜂起し、政府軍との武力紛争が起こります。そして、2022年2月には、ロシアによるウクライナへの全面侵攻が起こりました。この過程で、ロシア、ウクライナにおける女性兵士のありようにも違いが見られるようになっていきます。

愛国主義の復権と女性兵士

ロシアの1990年代は、非常に混乱した時代でした。2000年代にプーチン政権が経済を安定させ、支持を盤石にしていきます。その頃からロシアでは愛国主義が強調されるようになっていきます。そのなかで、いったんは否定的に扱われたり、あるいは忘却されていくように見えたりした英雄としての女性兵士のイメージが、再度強調されていきます。

2021年は、先ほどご紹介しましたゾーヤ・コスモデミヤンスカヤの死後80周年にあたるということもあってでしょうか、新しく映画が製作されたり、2020年には処刑地に新たにメモリアルコンプレックス——記念館のようなものです——が建てられたりもしています¹⁰。

2021年に製作された映画「ゾーヤ 戦場に消えた18歳の兵士」(原題30я)¹¹は、作品の出来はさほどではありません。ゾーヤの人物造形に特筆すべき点はなく、意志の強い、忍耐力のある女性という想像の範囲内です。

¹⁰ メモリアルコンプレックスの公式サイト<https://mk-zoya.ru/>

¹¹ 日本で発売されているDVDは「ロシアン・ソルジャー」と改題されている。

けれども、注目すべき点があります。私たちが見ると戸惑うほど、時の指導者スターリンをあたたかみのある良い指導者に描いているのです。ゾーヤが従事する作戦は、ソ連の住民を犠牲にするようなものでした。その作戦の実行を許可するにあたって、スターリンは苦渋の決断を下します。そして、作戦決行の命令を下すために、わざわざ実行部隊の破壊工作員に会いに来ます。スターリンに直接会えたゾーヤはうっとり陶酔の涙を流します。スターリンも、映画の後半で、破壊工作員の少女の強い決意を思い出し、自分も首都にとどまってドイツの攻勢に耐えてみせようと避難しようとしていたのを取りやめるといふシーンまであります。終盤、ドイツ軍に捕らえられたゾーヤは、集められた村人の前で見せしめ処刑されます。処刑直前、彼女は「スターリンは必ず来る」と高らかに叫びます。その言葉に応えるように、スターリンがこのゾーヤの墓を訪れるシーンで映画が終わるのです。言ってみれば1人の非正規部隊員に過ぎない少女が、まるで預言者のように描かれているのです。

スターリンは自国民を大量に粛清した冷酷非道な指導者として、死後、批判されています。ソ連崩壊後は、彼の時代の粛清の事実が掘り起こされ、強く非難されました。そのスターリンが再び父なる指導者であり、かつ人間味のある人物として描かれているというところに、この映画の最大の特徴があると思います。そこには、スターリンを再び礼賛する動き、あるいはソ連時代を再評価するプーチン時代のロシアの歴史認識が色濃く表れていると私は見えています。

ロシアにおける女性兵士の現状

その一方で、ロシア軍における現実の女性兵士は、割合的には低い水準にとどまっています。女性が就ける軍での職種も限定的です。2020年のデータですが、ロシア軍には女性が大体4万1,000人ほどいました。全体の4.26%ほどです。他の国に比べてかなり低い割合です。

ロシアはそもそも男子のみが兵役を課されていますが、忌避する人も多く、慢性的な人員不足に悩んでいます。しごきやいじめが頻繁に起きていることが大きな理由だといわれます。女性には兵役はないので任意で契約

をして入隊するのですが、就ける職種は限られているし、性暴力も頻繁に起こっていると報じられています。それにもかかわらず志願する女性はいるのです。

けれども、軍の幹部やアカデミズム、あるいはロシア社会には、「女性は兵士に向いていない」、「女性は単純で機械的な仕事をしていればいい」、「男性には簡単過ぎるが女性にはちょうどいい仕事をしてあげばいい」というような発言が出てくる風潮があります。まれに本人が自分から請願をしてパイロットなどの特別なポジションに就く例があるとメディアが盛んに取り上げる。そうすると、さも開かれた軍のように見えるのですが、実際にはそんなことはないようです¹²。

そもそもロシアでは、軍隊に限らず女性が就けない職業がたくさんあります。2021年に一部撤廃されましたが、なぜ就けない職業がたくさんあったかという、子どもをもうける妨げになるような仕事に女性は従事させないという方針があったからです。

そうした状況から、おそらく今後も人員不足が予想されますが、プーチンのロシアは非常にマッチョで、伝統的なジェンダー役割を重視していますので、ロシアが軍隊に積極的に女性を取り入れる動きは鈍いのではないかと思います。が、先のことはわかりません。

以上のように、ロシアでは、一方で愛国主義を盛り立て、祖国のために命を投げ出した女性兵士を再び讃美したりしながら、現実の女性兵士に対しては、その能力を認めず受容しようとしないう、アンバランスな現象が見られます。

ウクライナにおける女性兵士の現状とイメージ

ウクライナも相対的に保守的な社会でした。憲法上は両性の平等が保障され、女性の労働市場への参入も高いですが、やはり炭鉱や重工業の一部の職種などには女性は就けないというような禁止事項もありました。軍隊

¹² ロシアの女性兵士については、Chesnut (2020) および Roger (2013) を参照。

への女性の登用も消極的でした。女性議員の割合もあまり高くはありません。といっても日本よりは高いのですが。

ウクライナにおける女性兵士の増加と実態

ところが2014年の政変後、女性の志願兵が急増します¹³。2014年にウクライナはEUとの連合協定を調印する運びとなっていました。ところが、親露派のヤヌーコヴィチ大統領は、直前になって調印を撤回すると言い出します。これに対して市民が抗議運動を起こします。この運動は「マイダン革命」と後に呼ばれるようになります。「マイダン」というのは「広場」という意味です。この抗議活動に参加した人たちは、「この抗議活動を通してウクライナに初めて市民社会が形成されていったというように感じた」と口々に言っています¹⁴。抗議デモや集会は、当初は、ごくごく平和的でした。ところが政府の弾圧はだんだん強まっていき、100人からの犠牲者が出る事態になってしまいました。

それでも市民は抵抗をやめませんでした。最終的には大統領が逃亡したため、あらためて選び直すという展開になりました。これを見ていたロシアは危機感を覚えて、即座にクリミア半島を併合するという動きに出ました。さらに、ウクライナ東部にいた親露派勢力たちを支援します。

そうして親露派勢力とウクライナ軍との戦闘が始まりました。その動きを見ていた人たちの中から戦闘への志願者が現れます。当時ウクライナ軍は女性に対しては厳しい制限を設けていました。女性は戦闘員にはなれなかったし、撮影や通訳にも就けなかったのです。お給料にも差がありました。それでも参戦したい女性のなかからは、名目上は医療従事者や会計といった職種で登録しておいて、現地では戦闘に参加するという人まで現れ始めます。

¹³ Weichert *et al.* (2021) によれば、2008年には1800人だったが、2020年には3万人近くに達した。さらにウクライナ・デジタルトランスフォーメーション省制作の動画によると2022年には3万7千人を超えている。United 24 (2022)。

¹⁴ マイダン革命に参加した人々の回想はショア (2022) に詳しい。

経済的、地位的な利益のない女性の志願の動機

そのように戦場に赴く人たち、必ずしも戦闘員ばかりではないのですが、自ら志願する人たちの動機はそれぞれいろいろです。領土を守るため、自分の義務だと考えているというように、さまざま動機があるのですが、概してこういう人たちは、正式に登録されなくても参戦するだけあってモチベーションが高いです。

女性兵士の抱える問題

けれども、やはり戦場に行ってみると、たとえば女性用の制服が足りないとかないとか、女性用の兵舎の設備が整っていないといったさまざまな不便が生じます。あるいは、モチベーションも高く能力もあるのに、戦争は「男の仕事」で女性は補助者扱いされる、そのために男性よりも優秀であることを証明する必要があるといったことに直面します。負傷する人も当然出てきますが、正式な戦闘員として登録されていないので、けがの保障や、退役後の保障なども不十分であるという現状が出てきます¹⁵。

女性兵士の地位向上を求めるキャンペーン

こういった現状に直面した女性たちは、支援者らと共に、こういう現状があるということを広く知らせ、事態の改善を求める運動を展開します。この活動が功を奏して、軍における女性の職種の拡大が認められたり、各種の規制の撤廃が行われたりしていきます¹⁶。

2018年にはさらに男性との差がなくなり、ウクライナ軍における女性と男性の平等な権利と機会が、ほぼ確保されることとなります。

このような動きは、紛争の予防および解決、平和構築における女性の関与を拡大するという世界的な動向に合致するものだとして、ウクライナにおけるジェンダーの問題に関心をもつ人たちには肯定的にとらえられているようです。しかし、そういう女性兵士のための環境整備というのは、人

¹⁵ ウクライナの女性兵士の実態については、Khromeychuk (2017) (2018)、Martsenyuk (2017) に詳しい。

¹⁶ Kuz (2022)

類の歴史というスパンや広がりで見たととき、果たして「進歩」と言えるのか、私は疑問に思っています。

ウクライナにおける女性兵士の最新の表象を読み解く

最後に、現在のウクライナの女性兵士の描かれ方を紹介しながら、そこに潜む危険性を考えていきたいと思います。

2022年5月に開催されましたユーロビジョンというヨーロッパの国別対抗音楽祭で優勝したウクライナのグループ、カルシュ・オーケストラのStefania（ステファニア）という曲のミュージックビデオ¹⁷を見てみましょう。これは、もともとメンバーが母親への愛を歌った曲ですが、ロシアの侵攻後、ウクライナの抵抗ソングのようになっていきます。このミュージックビデオが、ロシアによる攻撃で廃墟と化したブチャやイルピン、ボロジャンカ、ホストメルといった町で撮影されているのです。ただしユーロビジョンでは政治的なメッセージは禁じられていますので、この映像はユーロビジョンに優勝した直後に公開されたものです。

ぜひ一度、映像を通してご覧ください。実によくできていて、うっかり虜になってしまいます。まだ煙がくすぶっているような廃墟から、おそらく実際の兵士と思われる女性たちが幼い子どもを救い出して、保護者に預けて自分は前線に戻るというストーリーになっています。戦闘とは最も遠い存在に思われる母親と兵士という存在が矛盾しないように描かれていて、私はこれを見たとき、強い衝撃を受けました。

けれども、よくよく見ますと、5人ほど女性兵士が出てきますが、それぞれ一瞬ですが涙を浮かべたりぬぐったりする場面があります。こういう表現は、男性兵士を取り上げる動画には作られないのではないかと少々引っ掛かります。また、気を付けないといけないのは、このビデオに出てくる女性兵士たちは戦闘行為をしていません。あくまで子どもを救い出す姿しか映りません。子を救う母という存在は、誰も否定できませんよね。

¹⁷ Kalush Orchestra - Stefania (Official Video Eurovision 2022) <https://youtu.be/Z8Z51no1TD0> (2022年5月15日公開)

そういう細部の描き方にも注意を向けたいところです。

彼女たちは、救出した子どもたちをその子のお母さんや自分の両親に託して再び戦場に向かいます。孫を託された年老いた両親は娘を不安そうに見送ります。ところが、預けられた孫は、まるでお母さんを応援するかのよう強い意志を感じさせる目をしているのです。そして最後のシーンです。炎上する戦車、火炎瓶を持った人へとカメラが移っていき、最後に顔が映ると、これが実は少女なのです。

もともとこれはお母さんを歌った歌なので、お母さんが主人公になるというのはわかりますが、登場する子どもたちもどうも女の子が多いような気がします。そこに、このラストシーンです。このラストシーンをどう解釈すればよいのか。母から次世代の娘へと戦いが引き継がれていくというようにも読み取れますね。気になる表現だと思います。

おわりに

駆け足ですが、ソ連、ロシア、ウクライナにおける女性兵士をめぐるイメージと実態を見てきました。これらの地域において、女性兵士は祖国防衛に重要な役割を果たしたと広くたたえられてきました。その姿は日常に溶け込む形でたくさんつくられ、風景としてなじんできました。しかし、現実の女性兵士たちは、戦場においても戦後の社会においても、偏見を受けたり、待遇が悪かったり、男性との格差があったり、性的な問題に悩まされたりとさまざまな困難に直面してきました。

ソ連解体後のロシアでは、かつての女性兵士の象徴がまた復権する一方で、現実の女性兵士たちは依然として男性より格下の扱いを受けています。

ウクライナにおいては女性兵士の待遇や環境面は整備されてきています。それと並行して、戦う女性を賛美して絶対的な正しさとする傾向が強まっているように思います。その点に私は懸念を抱いております。

皆さまはどうお考えになられるでしょうか。ご意見などをお聞かせいただければと思います。以上になります。ありがとうございました。

[謝辞]

本稿作成にあたりMartin MacDonald氏より多くの写真をご提供いただきました。記して感謝いたします。

Acknowledgment:

I thank Mr. Martin MacDonald for permission to use many helpful photos.

[参考文献]

※ウェブサイトについては2022年11月10日最終アクセス

アレクシエーヴィチ, スヴェトラーナ (2016) 『戦争は女の顔をしていない』 (岩波書店)

岡田譲 (2009) 『モスクワ地下鉄 「地下宮殿」の世界』 東洋書店

ショア, マーシ (2022) 『ウクライナの夜 革命と侵攻の現代史』 慶応義塾大学出版会

Bischi, Kerstin (2004) Female Red Army Soldiers in World War II and Beyond, Baker, C. (ed.) *Gender in 20th Century Eastern Europe and the USSR*

Chesnut, Mary (2020) Women in the Russian Military, CSIS (The Center for Strategic and International Studies)

<https://www.csis.org/blogs/post-soviet-post/women-russian-military>

Harris, Adrienne M. (2012) 'Memorializations of a martyr and her mutilated bodies: Public monuments to Soviet war hero Zoya Kosmodemyanskaya, 1942 to the present,' *Journal of War & Culture Studies*, 5 (1)

https://doi.org/10.1386/jwcs.5.1.73_1

Jauneau, É. *et al.* (2020) 'The Feminization of European Armies 19th-20th centuries', *Digital Encyclopedia of European History*

<https://ehne.fr/en/node/12310>

Khromeychuk, Olesya (2017) 'Experiences of Women at War Servicewomen during WW2 and in the Ukrainian Armed Forces in the Conflict in Donbas', *Baltic Worlds* 4 : 2017

<https://balticworlds.com/experiences-of-women-at-war/>

Khromeychuk, Olesya (2018) 'From the Maidan to the Donbas: the Limitations on Choice for Women in Ukraine', in Attwood, L., Schimpfössl, E., and Yusupova, M. (Eds.) *Gender and Choice after Socialism* (Basingstoke: Palgrave Macmillan), pp. 47-78. DOI: 10.1007/978-3-319-73661-7_3

Kuz, M. and Soguel, D. (2022) ' 'We want to keep Ukraine free.' Why women rise in Ukraine army', *The Christian Science Monitor*

- <https://www.csmonitor.com/World/Europe/2022/0223/We-want-to-keep-Ukraine-free.-Why-women-rise-in-Ukraine-army>
- McDermott, Roger (2013) 'The Role of Women in Russia's Armed Forces', *Eurasia Daily Monitor* 10 (213)
- <https://jamestown.org/program/the-role-of-women-in-russias-armed-forces/>
- Martsenyuk, Tamara (2017) 'Women and Military in Ukraine: Voices of the Invisible Battalion', *Ukraine Analytica* 1 (7)
- <https://ukraine-analytica.org/women-and-military-in-ukraine-voices-of-the-invisible-battalion/>
- Ministry of Defence of Ukraine (2022) *White Book 2021 Defence Policy of Ukraine*
- https://www.mil.gov.ua/content/files/whitebook/WhiteBook_2021_Defens_policy_of_Ukraine.pdf
- Palikot, Aleksander (2022) 'Fit For Fighting: Combat Training For Civilians Now Part Of Ukraine's Wartime Lifestyle' *Radio Free Europe/Radio Liberty*
- <https://www.rferl.org/a/ukraine-combat-traing-civilians-lifestyle/31993128.html>
- The Moscow Times (2019) 'Russia Opens 350 Banned Professions to Women, Stripping Soviet-Era Restrictions'
- <https://www.themoscowtimes.com/2019/08/16/russia-opens-350-banned-professions-to-women-stripping-soviet-era-restrictions-a66903>
- United 24 (2022) 'Military Women on the Ukrainian Frontline. Why they've chosen to take up arms? Fight for Freedom ep.5'
- <https://www.youtube.com/watch?v=U4Ye9gMqLJY>
- Weichert, S. and Filtenborg, E. (2021) 'For Ukraine's female soldiers, armed conflict is not the only danger', *Euronews*
- <https://www.euronews.com/my-europe/2021/05/07/for-ukraine-s-female-soldiers-armed-conflict-is-not-the-only-danger>
- Yuko, E. (2022) 'Women of Ukraine Fight Back: How They're Revolutionizing the Role of Women in War', *Reader's Digest*
- <https://www.rd.com/article/ukrainian-female-soldiers/>